

偽書というフェイク

——芥川龍之介、谷崎潤一郎、そして石川淳——

杉浦 晋*

【要旨】偽書は、事実（ファクト）もしくは現実（リアル）と虚構（フィクション）とのあいだに位置づけられる、もう一つの虚構（フェイク）であり、独特の事実⇨現実らしさ（リアリティ）を虚構（フィクション）に与える。芥川龍之介「奉教人の死」、谷崎潤一郎「春琴抄」、石川淳「喜寿童女」といった偽書の趣向に基づく近代以降の小説は、現実を拒絶して虚構に向かう指向とあわせて、近代以前の諸テクストによって自らを根拠づけようとする、いわばインターテクスチュアリティへの指向を有する。森鷗外の歴史小説や史伝はその先例とみなされ、たとえば「喜寿童女」は「洪江抽斎」にならった可能性がある。偽書をめぐる考察は、文学の想像力の本質にかかわる。

キーワード…偽書 フェイク 芥川龍之介「奉教人の死」 谷崎潤一郎「春琴抄」 石川淳「喜寿童女」 森鷗外「洪江抽斎」

一 事実もしくは現実とフィクションとのあいだ

近代以降の日本の小説において、虚構を事実（ファクト）もしくは現実（リアル）に根拠づけるために、ぎやくにいえばそれらに取材した虚構をうみだすために、実在の書物（文献）を典拠とした例は少なくない。後述する森鷗外の歴史小説や史伝は、その代表であろう。しかし、その書物の実在すら事実ではなく、虚構であるという例は、ごく少ない。この場合、小説の虚構は、事実もしくは現実によってではなく、偽書というべつの虚構によって支えられていることになる。

二つの虚構の関係は、あるフィクション（メタフィクション）といつてもよい）の内部におけるメタレベル／オブジェクトレベルの関係とし

て、基本的にはとらえられる。しかし、後述するように、本稿でとりあげる三篇の小説のうち少なくとも二篇については、オブジェクトレベルとしてフィクションに内包されているはずの偽書が、その外部で^{オブジェクト}実在するものと誤解されるという事態が生じている。虚構が事実もしくは現実として受容されてしまうという、こうした事態は、フィクションの内部からだけではとらえがたい。

したがって、以下においては、フィクションの内部と外部にわたる偽書という「オブジェクト」の二重性をとらえるために、小説それ自体の虚構と偽書の虚構とを区別し、前者をフィクション、後者をフェイクと呼ぶことにする。

フィクションは、この偽書というフェイクに根拠づけられることで、

*すぎうら・すすむ、埼玉大学大学院人文社会科学専攻教授、日本近現代文学

事実もしくは現実の装いを与えられる。ぎやくに事実もしくは現実、このフェイクをつうじて、いくらかフィクションの自在さを獲得するといえる。いわば偽書というフェイクは、事実もしくは現実と、フィクションとのあいだに位置づけられる虚構である。それは小説のフィクションに内包されつつ、一方で事実もしくは現実とつながっており、それらのまがいのものであると同時にフィクションのまがいのでもある。

事実もしくは現実の側からとらえるなら、こうしたフェイクの存在は、それらとフィクションの境界を揺るがし、それらへの信頼性を大きく損なうものである。ゆえに、偽書を作ったり広めたりする行為は、一般に糾弾の対象となる。

しかし、フィクションの側からとらえるなら、いいかえればその機能の一部としてフェイクをとらえるなら、それはフィクションに独特のリアリテイ（事実＝現実らしさ）を与えるものである。本稿では、偽書というフェイクのそうした機能ぶりを、三篇の小説を例にとつて考えてみたい。

二 芥川龍之介「奉教人の死」

芥川龍之介の短篇「奉教人の死」（一九一八・九）のあらすじは、以下のとおり。

キリスト教の寺院の門前に行き倒れていたらうらはんは、信仰あつく育ったが、傘張の娘と姦淫した咎で追放された。一年後、大火から娘の子を救ったらうらんの、焼けた着物の隙間から乳房があらわれ、人々を驚かせた。程なく彼女は息絶えた（一）。この物語は「予」＝「芥川龍之介」架蔵の一書『れげんだ・おれあ』による（二）。

この『れげんだ・おれあ』（黄金伝説の意。一般に聖人伝を指す）は偽書であり、のちにつまびらかにされたとおり、本作の典拠はべつに実在していた。しかし、本作発表後すぐに、内田魯庵、和田維四郎ら当代の識者が『れげんだ・おれあ』の存在を信じ、芥川に借覧、譲渡を求めたことが、薄田泣菫らによってゴシップとして広まった。本作の初刊（一九一九・一）に際して、芥川が末尾の自署を削ったのは、こうした誤解を回避する意図からだったと解される。自署は、偽書というフェイクとあわせて、リアリティを担保する一要素であったが、作者の實在に裏付けられたその自明の事実性ゆえに、いきおい事実らしさの「らしさ」を損なってしまった。すなわち、フィクションという内部を、それが作品であるという外部の現実と短絡してしまったのである。

短篇「きりしとほる上人伝」（一九一九・三、五）でも、つづけて『れげんだ・おれあ』が典拠とうたわれており、この趣向への芥川のごだわりがうかがわれる。その理由を考えるうえで、つぎの細川正義（2）のような見解は手がかりになる。

そして、「はらいそ」の「べろりあ」を仰ぎ見つつ「安らかなほほ笑み」を浮べて息絶えた「ろおれんぞ」「初刊時に「ろおらん」から改稿」の姿こそ、眞実世界への飛翔に美化された人間の實在を見ようとしていた芥川が、一種の仰望としてキリスト教世界に深く眼を注いでいた、その芥川の心情が全的に託された姿であったと言えるのである。

「奉教人の死」の物語がうみだされた背景に、現実を厭い「眞実世界への飛翔」を望んだ「芥川の心情」があったことは、じゅうぶん考えられる。ただし、一方でそれは、たんなる作り話であつてはならず、芥川が「仰望」する「キリスト教世界」の伝統によって根拠づけられる必要

があった。かくして本作の物語は、ずいぶんリアリティを欠いたフィクション(男性ばかりの寺院で育つたらうららが、ついぞ女性と気づかれななど、様々な不自然がすでに指摘されている)と、あまたの聖人伝の实在という事実のあいだに、前者として「美化され」つつ、後者によつて一定のリアリティをも与えられた虚構として生成することになった。いわば偽書というフェイクの設定に応じて、それを内包した本作のフィクション全体も、大きくフェイクに傾斜したのである。

三 谷崎潤一郎「春琴抄」

谷崎潤一郎の中篇「春琴抄」(一九三三・六)のあらすじは、以下のとおり。

この物語は、弟子の検校(佐助)が著したとおぼしい、「近頃私の手に入れた『鳴屋春琴伝』と題された小冊子による。卓越した技量の盲目の三味線師匠、春琴に、ともに年少の頃から仕える佐助は、春琴がその美貌を傷つけられるや、自らも両目を傷つけ、盲目の世界に入った。そして、春琴に先立たれるまで至福の交わりを結んだ。

五味淵典嗣³⁾によれば、偽書である『鳴屋春琴伝』が実在すると誤解した、すなわち「春琴抄」の物語を事実とみなしたうえで、好評が、本作の同時代評のなかにいくつも存在し、かたや不評のなかには、物語のリアリティの不足を難じるもの(丸岡明、杉山平助、佐藤春夫、徳田秋聲ら。たとえば秋聲は、目を突いた佐助が痛みを感じないことに疑義を呈した)が多くみられたという。

好評、不評のいずれにせよ、事実を虚構の上位に置き、虚構には事実⁴⁾に準じたリアリティを求めるといふ価値観に、ひとしく則していたこと

になる。自然主義文学の正典化に由来するものでもあろうが、いまそこまで詳述する準備はない。しかし、谷崎が、そしておそらくは芥川もまた、そうした価値観のなかで小説の虚構の可能性を追究し、偽書というフェイクに逢着したのはたしかであろう。そのことをふまえて、両者に特徴的とみられるモティベーションをとらえてみたい。

まず、三島佑一⁴⁾の考証が興味深い。三島は、春琴が失明し、佐助が奉公にきたのが一八三七(天保三)年であることは、作中の記述からあきらかなのに、それが大塩平八郎の乱の年であり、春琴の家が乱に襲われて不思議がない大店であったことは、その事実を谷崎が知悉していたであろうにもかかわらず、まったく伏せられている点を指摘したうえで、つぎのように述べる。

最後に、春琴・佐助の出生から始まって、元治二年(一八六五)春琴三七歳の折、何者かに熱湯をかけられ、大火傷の顔を見ないようにと佐助が自らの眼を突くクライマックスに至るまでの時期は、まさに幕末の動乱期にあたる。

そして谷崎が、『春琴抄』を構想し執筆したのが昭和七年から八年にかけて。日本が昭和六年満州事変に始まる十五年戦争に突入し、やがて日中戦争・太平洋戦争へと戦乱が拡大してゆく予兆の時期にあたる。

かつて伊藤整は、「佐助が、その目をつぶして、過去の春琴の美しさのみに心を集中して生き」たということは、同時に谷崎の「この時期における生き方全体を象徴」している、即ち「社会不安、革命運動、戦争の接近等に目をつぶり、ひたすら過去の日本の美しさの中に閉じこもるやうな述作生活をしてゐた」という意の評をし、谷崎にほめられたと語ったことがある。

佐助の盲目には、同時代の「社会不安、革命運動、戦争の接近等」の現実に対する、谷崎の盲目への意志が投影されていた。それは執筆時、昭和戦前の「動乱期」を、物語世界、幕末の「動乱期」に重ね、そのなかで自らを投影した人物に盲目を選択させる、という自覚的な手順をふんでいたことになり、渡部直己が、「外」に対する一種の抗弁」とみなしたように、消極的な否認ではなく、積極的な拒絶の姿勢のあらわれであった。

この盲目への意志と虚構への指向を重ねるなら、三島の考証は、谷崎のモティベーションの、ちょうど半分を説明している。ぎやくにいえば、これだけでは、五味渕が示唆したような自然主義的な価値観をふまえたとしても、その虚構が一方で事実もしくは現実にはむかい、偽書というかたちに収まったことの説明としては、じゅうぶんではない。

その残り半分を考えるうえで、つぎの鈴木千祥⁶の見解は手がかりになる。

関東大震災を機縁に関西に移住した谷崎が、上方文化の発見を描いた『蓼食ふ蟲』から始まった模索は、物語のふるさと、関西で生きることを決心したことを正式に告げた作品、『春琴抄』に行き着く。「中略」近世の戯作者の用いた文案の方法論で近代小説を創り、

物語のふるさと——『今昔物語集』の拘拏羅太子の説話、高安長者伝説、能『弱法師』、説教節『愛宕若』、『しんとく丸』、浄瑠璃『撰州合邦辻』へと、長い時代を経て豊かなテキストを生成させてきた上方文化——の流れに自らを連ねようと試みたのである。

谷崎の盲目への意志には、虚構への指向とあわせて、「物語のふるさと」の流れに自らを連ねよう」とする指向が含まれていた。佐助の盲目は、実在する「豊かなテキスト」群が伝える、いにしえの上方の物語の

主人公たちの運命をふまえてもいたのである。いわば谷崎は、現実を拒絶して虚構におもむく一方で、その虚構をまたの「豊かなテキスト」が伝える事実もしくは現実のほうに根拠づけようとしていたことになる。

かくして谷崎が「物語のふるさと」の流れ」にむかったことは、芥川が「キリスト教世界」の伝統にむかったことと重ねみられる。おそらくは、さらに古書へのフェイシズムなどにも導かれつつ、両者はともにフィクションと事実もしくは現実とのあいだでリアリティを模索し、偽書というフェイクにたどりついたのである。

四 森鷗外の影響の可能性

あらためて考えてみるに、自然主義的な価値観に則したリアリティと、「キリスト教世界」の伝統や「物語のふるさと」の流れ」に則したリアリティとは、いくぶんかは重なるにせよ、本質的には異なる。前者を担保する「事実」は、いわば現実的な事実にかざられるであろうが、後者は必ずしもそうではなく、ときに現実を拒絶した、想像的な事実すら包含するであろう。いにしえの「豊かなテキスト」の実在という、歴史的な「現実」にさえ基づいていけば。

してみれば、芥川、谷崎は、偽書というフェイクを介して、自らのフィクションを根拠づけるテキストを、さらには自らのテキストそれ自体を、「豊かなテキスト」のほうに位置づけようとしたとみなされる。芥川が、古典説話や講談本を典拠とした短篇を多く著していたこと、また谷崎が、長篇「武州公秘話」（一九三一・六～三二・一一）まで断続連載、長篇「少将滋幹の母」（一九四九・一一～五〇・二）といった、「春琴抄」

よりいっそう虚構性の高い、いいかえれば自然主義的な価値観においてはリアリティを欠くとみなされるような小説においてさえ、偽書の趣向を用いていたこと、くわえて一九三五年九月から三年ほどをかけて『源氏物語』の現代語訳に取り組んだことなども、同様の観点からとらえられる。

このような、いわばインターテクスチュアリティへのモチベーションは、もちろん芥川、谷崎にはじまるわけではない。近代以前において、自らのテクストの価値を先行するテクスト群とのかかわりによって担保しようとすることは、むしろ当然のふるまいであった。両者はフェイクをつうじて、近代においては失われつつあるかにみえた、このモチベーションの回復を志したのである。いささか大げさにいえば、それは近代小説が獲得してきたフィクションのリアリティを、インターテクスチュアリティに置換する、もしくは差し戻すという意味で、反近代的な試みであった。

そして、両者に先んじて、しかもとくにフェイクによることなく、それを自らの小説の方法として実践していたのが、森鷗外であった。「興津弥五右衛門の遺書」（一九二二・二〇）以降の歴史小説や「洪江抽斎」（一九一六・一〇五）以降の史伝の試みは、そのみことな成果であり、芥川、谷崎に影響を及ぼした可能性は否定できない。

千葉俊二⁷は、「洪江抽斎」と「春琴抄」の「読後の印象の類似」を「手法の問題」につなげて、つぎのように述べている。

「洪江抽斎」にしても「春琴抄」にしても、作者そのひとにも擬せられるような語り手が、フトしたことから未知の人物に関心をよせて、その生涯を知ろうと墓所を訪ね、縁者を探りだし、そこから知り得た材料を自在に再構成し、時には史料の信憑性を疑いなが

ら、あるいは典拠の欠を語り手の解釈もしくは想像によって補い、物語を展開してゆくという方法をとっている。

「物語」と「史料」「典拠」との「語り手」を介したインターテクスチュアルな関係がとらえられている。ただし、千葉は鷗外と谷崎との「影響関係」には懐疑的であり、つづけて「鷗外の史伝が事実を支えられていたのに対して、谷崎は言葉の空中楼阁に「ほんたうらしさ」を希求するのである」などと述べ、むしろ両者の差異にこそ注目している。こうしたみかたは、鷗外の史伝と谷崎の「古典回帰」の近似を指摘しつつ、「減算的な仕事」と「加算的な生氣」という差異を強調してみせた渡部直己⁸にもつうじる。

いま偽書というフェイクをめぐる、鷗外と芥川、谷崎とのつながりを、さらに追求する準備はない。そのかわりに、鷗外から多大な影響を受けたとおぼしく、芥川の偽書と同じく「黄金伝説」と題した小説（一九四六・三）と小説集（同・一一）を発表し、芥川、谷崎と同じく偽書の趣向による小説を発表した文学者について、つぎに考えてみたい。

五 石川淳「喜寿童女」

石川淳の短篇「喜寿童女」（一九六〇・七）のあらすじは、以下のとおり。

写本三冊の記事によれば、江戸の名妓、花は、千人以上の男達と交わり、七七歳の賀宴の夜、神隠しにあったという。さて「ちかごろ某家の古書売立あり」で、「わたし」は稿本二冊の合綴^{しゅうぞう}を入手した。記された物語は以下のとおり。花は、千賀一榮から清朝伝来の秘術を施され、色道に通じた一一歳の童女に転生し、徳川家斉^{いんぎやう}に溺愛された。家斉の死

は、一榮と花のたくらみである(『妖女伝』)。明治の世となり、花は異人の男達に寵愛され、ハルピン駅で暗殺された伊藤博文と連れ添っていたのを最後に消息を断った。伊藤の遺品のシナ鞆の底からは、あまたの淫具とともに童女の人形が見つかった(『妖女伝続貂』)。

谷崎の盲目への意志が「春琴抄」に投影されていたことは先述したが、「喜寿童女」についても、さしあたり同じようなことがいえる。本作が発表された一九六〇年は、日米安全保障条約の改定に反対する市民運動が高揚した年であり、その五月十九日の強行採決、また六月十九日の自然承認にむかう情勢に、本作の構想、執筆中であつたとおぼしい石川は、つよく関心を持っていた。というのも、石川は安保改定に反対する立場から、この年二月一〇日から一二日まで「東京新聞」にエッセイ「自由について」を連載し、六月四日に明治大学で開かれた反対集会で、講演までおこなっていたのである。⁹⁾

しかし、そうした時局のかけは、本作にさやかにみられない。このことは、まず谷崎の場合と同じく、消極的な否認ではなく、積極的な拒絶の姿勢のあらわれとみなされる。昭和戦前を「幕末の動乱期」に重ねた谷崎のように、石川も安保改定をめぐる戦後の混乱を、幕末から明治に至る「動乱期」に重ねたのであろう。そのうえで、ひとしく両者は、偽書というフェイクによって、いにしへの「豊かなテキスト」につながるフィクションを作ってみせた。『妖女伝』二冊の物語は、石川が傾倒した上田秋成¹⁰⁾の諸作(たとえば『春雨物語』所収「二世の縁」は、男女のちがいこそあれ、『妖女伝』と同じく二世にわたる妄執と転生の物語である)に代表されるような、江戸戯作の綺譚の数々をおのずから連想させる。石川が、谷崎の先例を意識した可能性はある。

しかし、いわばきっぱりと現実への盲目を選択した谷崎に対して、石

川はどうやら薄目ぐらひは開けていたようだ。しばらくそのことを検証してみる。

「喜寿童女」の末尾には、『妖女伝続貂』の筆者「迂生」の「さらに奇異の感を三重にせずんば非ず」と結ばれる「感慨」が引用されている。その要諦は、つぎのとおり。

一重……花が七七歳で童女に転生し、さらに七七年目に消息を絶つたこと(虚構)。

二重……花の霊と肉のゆくえが不明であること(虚構)。

三重……徳川家斉、伊藤博文が、ともに六九歳で亡くなったこと(事実)。

物語のはじまり、すなわち花の七七歳の賀宴が一八三三(天保四)年三月一日(虚構)であり、家斉の六九歳の死が一八四一(天保二)年一月三〇日(事実)であり、物語のおわり、すなわち伊藤の暗殺が一九〇九(明治四二)年一〇月二六日(事実)であることは、それまでにあきらかにされていた。

してみれば「奇異」とは、以上のような歴史上の事実と虚構のあいだ、いわば近松門左衛門のいう「虚実皮膜」において、両者がないまぜになって生成されるリアリティのことであった。くわえて、「わたし」が『妖女伝』の「筆者は真実といふ白烟を秘めるために「稗史まがひ」といふ手筈を撰んだ」と述べていることも、同じようにとらえられる。「稗史まがひ」とは、「真実」と「稗史」すなわちフィクションとのあいだに「奇異」を生成させる方法のことであり、偽書とは、その表象としての「手筈」＝フェイクのことである。

ところで、以上は作中で明示された趣向であるが、さらに本作には、おそらくはあえて明示されなかった、いわば「四重」めの「奇異」の趣

向が存在した。じつは、家斉の没年の一八四一年は伊藤の生年に同じく（事実）、前者は後者に転生したとみなされる（虚構）のである。してみれば、花の転生は家斉から伊藤への転生を追いかけ、代々の祟りのごとく、両者をつづけて破滅させるためにおこなわれた（虚構）ことになる。

「大御所時代」と呼ばれた家斉の治世は、谷崎「春琴抄」の物語の時間と重なり、自身の乱倫、老中水野忠成の悪政、天保の飢饉、大塩平八郎の乱などによる「動乱期」であった。また、やはり乱倫ぶりで悪名高かった伊藤博文が生きた時代も、幕末から、明治維新、日清・日露戦争、日韓併合に至る「動乱期」であった。家斉と伊藤が、それぞれの時代における権力の頂点に君臨したことはいうまでもない。石川は、こうした史実をふまえたうえで、あいつぐ「動乱」を終わらせる力を、花という傾城の妖女によってあらわしたのである。

そして、以上のことは、本作執筆時の「動乱」の責任者、「昭和の妖怪」こと岸信介（一八九六―一九八七）が家斉、伊藤の転生であり、総理大臣として安保改定を強行した答によって、同じ六九歳で妖女にとり殺されるという見立てを、おのずから導く。岸が伊藤と同じく山口県（周防国）の出身であることは、広く知られていたであろう。ただし、家斉、伊藤のような乱倫の評判は、管見のかぎりでは確認できなかった。また、岸はその後、六九歳をはるかに越える天寿を全うしている。さしもの妖女の祟りも「妖怪」には通じなかったか……というのは、もちろんフェイク、もといジョークである。

いさか大げさにいえば、岸が主導した安保改定という政治的な現実に対して、石川は二冊の『妖女伝』という偽書のフェイクをもって対抗してみせたのである。ただし、それがフェイクの政治参加にすぎず、豊

かな「物語のふるさとの流れ」につらなり、芥川、谷崎の先例のように実在するものと受け取られるかもしれないにせよ、客観的にはほとんど政治的な有効性を持たないことも、もちろんあわせて意識されていたはずである（新聞エッセイや講演のほうには一定の有効性を認めていたであろうが）。してみれば「四重」めの「奇異」の趣向、すなわちフェイクを現実につなぐリンクの存在は、小説による政治参加に対する石川のささやかな積極性を、いいかえれば拒絶したはずの現実への注視を示唆しており、それがついに作中に明示されなかったことは、盲目には至らない程度の消極性の、いいかえれば薄目のあらわれであったことになる。

六 「洪江拙齋」とのかかわり

「喜寿童女」における、事実と虚構のないまぜによる「奇異」＝リアリティの生成は、偽書というフェイクの内容においてのみならず、その来歴や筆者においても認められる。

作中『妖女伝』は、蔵書印などから、兄の喜多村香城（龍尾園）から弟の栗本鋤雲に伝わったとされている。ともに実在の人物である。そして『妖女伝』『妖女伝続貂』の筆者はともに不明であり、ただ後者については鋤雲門下のジャーナリストであろうと推測されている。興味深いのは、前者について、つぎのように述べられていることである。

末段に至つて、文字の書きぶりのみだれてゐるのは、筆者の憂患のせいかな、老年のためか。「中略」さだめてこれ自筆の稿本である。筆者の正体はついに知れない。おそらく天保より嘉永の間、政治の外に立つて、幕府の運の傾くを見つめてみた直参の士だらう。そ

の蘭方の禁を難ずる口物をおもへば、あるいはこのひとみずから洋学にころざしを潜めた医官の一人か。「中略」ただ臆断をあへてすれば、伝の筆者は幕府医官としておそらく香城の先輩であり、その稿本が龍尾園に秘められたのではないかといふのみである。

「憂患」「老年」「政治の外に立つて」「洋学にころざしを潜めた」といった記述は、石川その人を彷彿とさせる。石川はフランス文学につき、本作発表時に六一歳であった。また、その祖父鉄太郎（省齋）は、香城、鋤雲と同時代を生きた、「直参」には及ばずながら忠孝の「士」であり、香城、鋤雲と同じく儒学を学び、昌平坂学問所に勤め、鋤雲と同じく維新後に官職に就くことを拒み、文人として生涯を終えた。¹¹さらに、鋤雲が外国奉行としてフランスを訪れていたことは、石川に親近感をおぼえさせたのではないか。

このように、まず『妖女伝』二冊の内容の虚構が、その来歴にかかわった香城、鋤雲の実在という事実とないまぜになり、偽書の「奇異」リアリティが生成される。さらに、その筆者に石川自身とその祖父のおもかげが重ねられることにより、リアリティがいつそう際立っているのである。

くわえて、香城、鋤雲は、森鷗外の史伝「渋江抽齋」「その六十三」によれば、毎月の「説文会」をとにもするほどに、抽齋とゆかりの深い人物であった。してみれば、立場や年齢の差はあったにせよ（抽齋は一八〇五年、香城は一八〇四年、鋤雲は一八二二年生まれ。石川の祖父は一八三〇〜四四年の生まれと推定されている）、石川の祖父がそこに加わっていた可能性も絶無ではなかった。

先述したように、同作にはじまる鷗外晩年の史伝三部作などは、芥川、谷崎に方法上の影響を及ぼしていた可能性がある。そして、石川におい

てその可能性はいつそう高く、その評論集『森鷗外』（一九四一・二二）は、史伝三部作を鷗外文学の精髓として評価するものであった。¹²

石川は、鷗外が抽齋の、すなわち自らが江戸の世に生まれていたら同様の人生を送ったかもしれない人物の事蹟をたどった先例を、インターテクスチュアルにふまえつつ、抽齋周辺の二人と祖父の事蹟をよすがとして『妖女伝』の筆者を創造し、「喜寿童女」を執筆したのであろう。それは、いわば自らと自らの作品をフェイクとして江戸の世に転生させ、「奇異」に化さんとする試みであったということができる。

七 作家論から一般的考察へ

以上の考察を、個別的に石川の作家論につなげる手がかりはいくつかある。たとえば、エッセイ「わが小説」（一九六一・一一・四）において、石川はみずから「喜寿童女」の偽書に類した趣向のさきがけを、応仁の乱を背景に架空のヒロインを躍動させた、すなわち、やはり「動乱期」を舞台としつつ、事実と虚構をないまぜにした長篇「修羅」（一九五八・七）に認めていた。こうした歴史小説のフェイクともいふべき方法は、現代を舞台としつつ、偽書を介して神話的な過去への通路をしつらえた長篇「狂風記」（一九七一・二〜八〇・四）や、盗賊の首領が奈良時代と現代を往還する趣向の長篇「六道遊行」（一九八一・六〜一二）に至るまで、さまざまに変奏されながら、以後の石川がしばしば用いるところとなる。

つとに吉田拓也は、「喜寿童女」の「史実と虚構が組み合わさる構造」の分析をふまえて、「稗史」（野史）と「正史」、「真」と「偽」といった「喜寿童女」における問題意識は、石川の晩年に至るまで問われてい

たものであった」と述べている。¹³⁾ この「問題意識」は、最晩年のエッセイ「偽書」(一九八六・六)にまで持続され、あきらかに右のような方法を裏づけていた。

それが、日本において「動乱」を、いや革命をめざす運動が現実的に頓挫した、一九五〇年代後半から試みられていたことも興味深い。というのも、敗戦からそのころまでは、石川は近代以前の過去ではなく、むしろ同時代を舞台とし、政治的な現実への盲目や薄目ではなく、ぎゃくに注視にもとづいた小説をこそ、つづけて発表していたからである。¹⁴⁾

(当時の石川が、政治と文学(芸術)の関係をどのようにとらえていたかを考えるうえで、「喜寿童女」の直後に発表されたエッセイ「政治についての架空演舌」(一九六〇・九)は、きわめて重要である。その詳細はべつの機会に委ねるが、ここで石川は、アンチ・ロマンの流行にかこつけてアンガージュマンを批判し、「芸術」の「政治からの離脱」を主張しているようにみえるものの、じつは「事物プロバー」(唯物?)という接点から、両者のつながりをあらためて、想像的に担保し直そうとしているのではないかという見込みだけは、いま記しておきたい。すなわち「事物プロバー」とは「政治」と「芸術」のあいだに実在するもの^{オブリジェクト}として想定され、それは「奇異」が事実もしくはは現実と虚構のあいだに想定されることと、ちょうど照応している。

また、この「奇異」の語は、そもそも石川の実質的なデビュー作「佳人」(一九三五・五)の「わたしの努力はこの「人生の」醜悪を奇異にまで高めることだ」という、作家としてのマニフェストめいた一文に、すでにみられた。¹⁵⁾ してみれば、事実もしくはは現実の「醜悪」と虚構、そのあいだに生成する「奇異」という三者の動態を観点として、石川の作品史をたどることもできそうである。

しかし、もちろん偽書というフェイクが喚起するプロブレマティックは、芥川、谷崎もあわせて、一家論の範疇にとどまるものではない。洋の東西を問わず、文学史には示唆的な例が少なからずみいだされる。就中、ステファヌ・マラルメの有名な「世界は美しい一冊の書物に至るために作られている」という言葉は、インターテクスチュアリティの極北の表象をつうじて、偽書というフェイクにむかう想像力の起源を示唆しているとみなすことができる。

近代以降の日本にかぎってみれば、本稿の考察の範囲からは外れるが、藤原明¹⁶⁾らがとりあげた、記紀以前の歴史を記したというさまざまな偽史・偽書の例が、それらの多くが明治維新、第二次世界大戦の前後といった「動乱期」に流布したこととあわせて、まず想起される。

詩と小説に目をむければ、鷗外の歴史小説や史伝と同じ頃に書かれた、永井荷風の短篇「四畳半襖の下張(二)」「(一九一七・七)、及び同題のボルノグラフィの例が注目される。両作はともに、襖の下張として発見された反古という、春本のような「豊かなテキスト」にありがちな偽書の趣向に則りつつ、かたや作者の自己像を戲画的に、かたや性的妄想を様式的にあらわしている。こうしたフィクションのリアリティは、たとえば谷川俊太郎の詩集『タラマイカ偽書残闕』(一九七八・九)や、村上春樹の長篇「風の歌を聴け」(一九七九・六)の「ぼく」が偏愛する「デレク・ハートフィールド」の諸作などの例と、あえてジャンクな偽書に仮託した、匿名もしくはは偽名による、屈折した自己表現であるという点で、重ねてとらえられる。

また、夢野久作の長篇「ドグラ・マグラ」(一九三五・一)には、本作と同じ題名、内容の原稿が、精神病患者の作品として登場する。谷崎「春琴抄」と同じ頃に書かれた本作は、もう一つの「盲目」の症例とし

て読むことができる。さらに、本作における「作中で言及されている作品（書物）こそ、まさにいま読まれつつあるこの作品（書物）である」という趣向は、「擬物語詩」という方法を提唱し、偽書もしくはそれに類した趣向による詩を多く書いた入沢康夫が、評論集『詩の構造についての覚え書——ぼくの〈詩作品入門〉』（一九六八・二）で述べていたように、「陳述が陳述自身についてコメントするという構造の特質」にかかわる、すなわち、やはり偽書の想像力の起源を示唆するようなフェイクのかたちを示している。虚構が、べつの何かによってではなく虚構自らによって、すなわち虚構（フィクション）の内部の虚構（フェイク）によって根拠づけられるというかたち。本稿のはじめに示唆したように、これはメタフィクションの基本構造に「つじむる」ものであり、その考察には諸論の参照を要する。

かくのごとく、偽書というフェイクをめぐる一般的考察は、わたしたちに文学の想像力がわきたつ、広大な沃野を開示する。

注

(1) 偽書をフィクションと区別してフェイクと呼んだのは、管見のかぎり、中川右介『世界を動かした「偽書」の歴史』（KKベストセラーズ、二〇一八）を嚆矢とする。しかし、同書や後掲（16）のような類書が、最初から実在するものとして作られ、広まった例をとりあげたのに対し、本文で述べたように本稿では、オブジェクトレベルとしてフィクションに内包され、事後的に実在するものと誤解されたこともあった例をとりあげる。ちなみに、この意味におけるフェイクは、Wikipediaの「偽書」の項目では「8 フィ

クションにおける来歴の虚偽」という小項目に該当するであろう（二〇二二・一・五 閲覧）。

- (2) 『芥川龍之介『奉教人の死』論——キリスト教への深い関心において——』『人文論究』66、二〇一六）pp.18-19
- (3) 「漸近と交錯——「春琴抄後語」をめぐる言説配置——」『大妻国文』43、二〇二二）
- (4) 「第二部 舞台裏のなぜ」『谷崎潤一郎『春琴抄』の謎』人文書院、一九九四）pp.147-148
- (5) 「死ンデモ予ハ感ジテ見セル——谷崎潤一郎の「家庭」小説」『私学的、あまりに私学的な 陽気で利発な若者へおくる小説・批評・思想ガイド』ひつじ書房、二〇一〇、初出は二〇〇四）p.508
- (6) 『春琴抄』典拠再考——『撰州合邦辻』から『春琴抄』への生成を主に——『法政大学大学院紀要』80、二〇一八）p.184
- (7) 「鷗外と谷崎潤一郎——「洪江抽斎」から「春琴抄」へ」『国文学解釈と教材の研究』50-2、二〇〇五）p.102
- (8) 「第八章 「文」はどのように「人」めくのか？——鷗外の「史伝」と谷崎の「古典回帰」」『日本小説技術史』新潮社、二〇二二、初出は二〇一一）p.416
- (9) 渡辺喜一郎「石川淳伝記的年譜」『石川淳傳説』右文書院、二〇一三）p.237以下。
- (10) 石川の秋成への傾倒については、拙稿「石川淳「山桜」試論」『東京成徳短期大学 紀要』28、一九九五、及び「石川淳「山桜」をめぐって——ネルヴァルから秋成へ、あるいはロマン主義の克服——」『埼玉大学紀要（教養学部）』55-2、二〇二〇）で、短篇「山桜」に即して述べた。

- (11) 石川の祖父の事蹟は、前掲(9)『石川淳傳説』の「I部・第一章 二人の〈祖父〉と〈祖母〉」に詳しい。
- (12) 「石川淳「喜寿童女」論——〈稗史〉との関係をめぐって——」(『阪神近代文学研究』21、二〇一〇) pp.69-72
- (13) 拙稿「石川淳『森鷗外』をめぐって——岩上順一、伊藤整、小林秀雄との比較——」(『文学』8・2、二〇〇七)を参照。
- (14) 拙稿「石川淳『鷹』試論——二つの「鳩」^{トビ}と「鷹」をめぐる考証の試み——」(『国語と国文学』104、二〇一〇)を参照。
- (15) ただし、初出では「怪奇」であり、初刊(一九四六・一一)に際して「奇異」に改められたことを、山口俊雄が報告している(「佳人」論」注(45)、『石川淳作品研究「佳人」から「焼跡のイエス」まで』第一部・第一章、双文社出版、二〇〇五) pp.46-48)。
- (16) 『日本の偽書』(文春新書、二〇〇四)

引用について、旧字は新字にあらため、注記は「」で示した。石川淳の参照、引用は、『石川淳全集』(筑摩書房)によった。

本稿の内容は、科学研究費・基盤研究(A)・研究課題／領域番号16H0191「編集文献学の実践的展開——文化の継承と教育への応用」(研究代表者：明星聖子)の研究会(二〇二〇・二・二六)における口頭発表に基づく。ご意見を賜った方々に深謝申し上げます。